

千里眼は二つある

Happy-go-Lucky やーちん

「落ちたな」

「ここであの下げはねーわ!」

「買うなって言ったのに」

それぞれの悲鳴が飛び交い、今日の取引に対する後悔や羨望、当てにならない予測から邪推まで、剥き出しの欲望が思い思いに記されている文字列を見た。

イチは掲示板が表示されていたブラウザを閉じた。

パソコンのディスプレイに表示された「ただ今の取引金額 2,000,000 円」の画面に目を移してから、平日の休日に、自分の部屋で何をするともなく彼は天井を見つめていた。

高校を卒業してからの二年間、製品会社の営業見習いをしながら少しずつ貯金をした。休日もあり遊びに行く事はなく、プレゼントを贈るような彼女もない彼にとって、百万円を貯めることはそれほど苦労を背負い込むようなものではない。

それを元手に株式投資を始めたのが、昨年冬。珍しく大雪が積もっていた夜にインターネット専門の証券会社から口座開設通知が届いた時には、それまでの仕事のストレスも一気に吹き飛んだ気がした。

これで一気に手持ちのお金を増やすことができる。

元手にした百万円で一ヶ月程、大手企業の株を買ってみた。自分の買った株が一円上がる度に喜び、一円下がる度に落ち込んだ。このままでは心臓がそのうちやられちゃうんじゃないだろうか、と思う。

幸い買値より五パーセント程儲ける事ができたので、無事に売り抜けることができた。テレビニュースでは「株式市場、最高値更新中」の台詞を嬉しそうにキャスターが伝えていた。株式投資で一億円儲けるにはという談話が雑誌を飾り、街をゆく人の顔にも華やいでいるような、浮かれた気分の人が多くなっていた。

株式投資を初めてわずか半年前のことが、今は小学校の頃を思い出すように遠く感じられた。

我に返ったイチは取引状況を見張るかのようにディスプレイを見る。現実は何も変わらない。

取引金額 2,000,000 (制度信用)

これが黒字であったなら、マイナスでなくプラスなら、どんなに良かったことだろうか。

玄関のチャイムが鳴った。落ち込んでいた時に誰だよとも思ったが、仕方なく出る。

ドアの向こうからは、見知った幼なじみの顔が手を振っていた。片手には小さな袋が握られている。

「やつ！」

「ちづ姉ちゃん……」

「これ、旅行土産のおすそ分け。上がっていい？」

彼女はイチにお土産の菓子袋を渡す。

「いいよ」と言う前に、ちづ姉ちゃんと呼ばれた女性は颯爽とイチの部屋に入ってしまった。イチの許可なんて形式だと言わんばかりに、さも当然のごとく。

幼なじみ故の行動。「あの千鶴さんが、このイチを、七瀬一を気に入っているなんて世の間違ったすぎだろ？」と、数少ない友人の三島には会う度に言われている。

客人用のコーヒーだけ用意して部屋に戻ると、ちづ姉はさっそく部屋の物色を始めていた。

「前に来た時から、変わってないね。その様子だと彼女もまだみたいだし」

イチに持ってきたはずの菓子を自分でつまみながら、ちづ姉が言う。

「そういうちづ姉ちゃんの方こそ、彼氏でもできたの？」

「あ、あたしの方はどうだっていいのよ。あたしさえその気になれば、付き合いたって男はいくらでもいるんだから」

幼なじみだから顔を見て話すこともできるのだが、ちづ姉が子どもの時からの付き合いでなくて、最近知り合ってイチの部屋にいるという状況ならば、きっと顔も見られず、話もしどろもどろになっているに違いない。

同年代の女性にしては長身ではあるが、高すぎることもない適度なスタイルに漆黒の髪がよく映える。そのままつばの広い白い帽子とワンピースでも着せてみれば一人前のお嬢様のできあがりだ。実際、三島もちづ姉の言う「付き合いたって男」の一人に入れられていた。

「どうしたの、浮かない顔して。恋愛のこと？ 悩みがあるのならお姉さんに相談してみなさい。ほれほれ」

前言撤回。黙っていれば、お嬢様だ。

しかし、お節介とも言えるちづ姉の行動はイチにとって嫌いではなく、むしろ心地

良かった。英語が分からなくて、試験前に尽きつきりで勉強を見てもらった時も。気になっていた女の子に対してきっかけを作ってもらった時も。ちづ姉に手を差し伸べてもらった機会は数え上げると切りがない。

イチは既にスクリーンセーバーが自動起動しているディスプレイを見た。

「これ、見て」

観念したような口調でイチがパソコンの前に座る。画面には再び株取引画面が表示されていた。イチの後ろからちづ姉が取引画面を覗きこむ。元から人より大きい目だと言われるちづ姉の瞳が、さらに大きくなった。

二百万円のマイナスが相も変わらず表示されている。

「イチ。あんたって子は」

今度はできの悪い教え子を諭すような口調。雷が落ちるかといちは身をすくめたが、ちづ姉はそれ以上何も責めなかった。

ことの発端は株式投資を始めて四ヶ月後。二十歳の誕生日を迎えた春の頃だった。

徐々に売買に慣れてきたイチは、東証一部から二部、ジャスダック等の新興市場まで手広く範囲を広げていた。株取引の知識など相場に無用で、上場している株式の中からルーレットでどれかひとつを選んで株を買ったら、九割の確率で利益は確保できる時期だった。買値から二倍、三倍に値上がりする銘柄も少なくなかった。

イチもこの恩恵を受けた。ビギナーズ・ラックも相まって、一時は手持ちの百万円が瞬く間に二倍以上に膨れ上がった。これさえあれば、仕事がなくても生きて行ける。そんな気持ちにさえなるのも無理からぬことだった。

20世紀末のバブル崩壊、21世紀直後の「コ」バブル崩壊。始まりがあれば、必ず終わりはやって来る。ある企業に不祥事が発生したことを引き金に、市場が反転。折しもアメリカの不況の影響も受けて、膨らみすぎていた株価は、風船が萎むよりも早くその価値を下落させていった。

イチが得た利益は瞬く間にゼロになった。

それでも虎の子の百万円は残っている。なあに、あれだけ儲かっていたんだ。すぐに取り返せるさ。

「……それで焦って信用に手を出して、あつという間に大やけど。元手どころか、借金背負っちゃった、と」

ちづ姉の尋問に、力なくイチは頷いた。

「よくある話よね。信用で一点集中全力買い、それで負ける。父さんも言っていたわ

よ。『身の丈にあった取引をしろ』とか『個人が信用するなら、売りだけにしろ』とか  
信用取引とは借金をしてまで株式を売買する行為だ。数億円が数百円にしか見えず、  
湯水のように金が溢れる大富豪や、本当に株式投資の勉強をした人にとつては有用な  
手法だが、経験が浅いイチに取つては、虎の子を他の参加者に刈り取られる場では  
なかった。

呆れた表情で、ちづ姉はイチの本棚を見た。著者・片桐光太郎と記された、株式取  
引についての初心者本が何冊か並んでいた。

千里眼・片桐光太郎。

投資の世界に身を置く者ならば、その名前を聞いた事があるだろう。現役のトレー  
ダーとして働いていた十年程前に、株式のコラムを書いて欲しいと出版社から依頼さ  
れたことがきっかけで、世間にその名を轟かせることとなった。

今後の株式市場の予測から、一企業の株価予想までことごとく正確に的中させた。  
あまりに当てすぎたために、着いた異名が『千里眼』。今こそ第一線を退いたが、彼  
の予測した株価や編み出した投資手法を書いた本は、なお売れ続けていると言う。

「終わったことはしようがない！」

ちづ姉がイチの頭をポンと叩いた。いつもこうだ。

「奪われたものは全部取り返す。株で負けたのなら株で。もう一度始めからやり直す  
わ」

「それって結構危ない考え方なのじゃあ……」

既に二百万円もの損失を出している。株式投資に資金を振り分ける余裕はそう多く  
ない。

「イチ、あと残りいくらくらい出せる？」

「かき集めて三十万くらいなら」

それだけあれば十分すぎるよと、ちづ姉が笑う。

「『千里眼』の娘、片桐千鶴。一度だけ、あんたを助けてあげる」

「ちづ姉、株できるの!？」

イチが驚いて、ちづ姉の方へ振り向く。父親があつた片桐光太郎であるのは昔から知  
っていたが、ちづ姉自身が株式をやっていることなど聞いた事がない。

「当たり前でしょう。これでも十年以上やっているわよ」

「小学生の頃から！」

「まあ、ね。元々は父さんから教わたただけだけど。面白くてそのまま続けているの。

子どもの頃は、同年代に言っても誰も分からないしね。あたしも話さなかった。今で

もほとんどの友達は知らないよ」

「それとも何かなあ。イチくん。このあたしでは力不足なのかなあ」

イチを小脇に抱えると、ちづ姉は、握ったこぶしをイチの頭をぐりぐりと押し付けた。

「痛い。痛いって」

本当は痛みよりも先に胸が顔に当たる恥ずかしさがやってきて、ちづ姉を押しつけるように離れた。イチの全身が風呂上がりのように熱くなっている。もうすぐ大学を卒業するだろうに、そんな子どものようなことをするか、この「姉」は。

「父さんは講演とかであちこち飛び回っているし。忙しいんだからね」  
続いて、言った。今までにない口調で、はつきりと。

「私に賭けなさい。あなたが信じ続けた、この姉に」

それから二ヶ月が過ぎた。季節は確実に春から夏に移っていた。

ちづ姉は、イチに今持っている株を全て処分させた。そして、自分が指定した企業の株を買わせた。

欲望が渦巻く市場の中で、ちづ姉という水先案内人を得たイチの資金は、再び上昇を始めた。ちづ姉の売買するように指定した企業の株式価格は、予想が全て外れる事もなく急激に値をつり上げた。

その取引振りは、千里眼・片桐光太郎の手法を彷彿とさせた。本当は父親すらも上回る腕なのではないか、とイチには思えた。

借金として抱えていたマイナスの残高が二百万から百万になり、やがてゼロになった。そして、さらに一ヶ月が過ぎた頃。イチの資金は元手の百万円を少し越えるくらいにまで見事に復活していた。

「どう？ あたしの腕前」

「信じられない」

「お礼くらいしなさいよお。そうそう、この前駅前に新しいケーキのお店ができたんだって。けっこう評判良いらしいわよ」

「うん。明日買って行くよ」

「イチも、父さんと一緒に手間がかかるよねえ」と言いながらも、ちづ姉の声は明るく、楽しさをにじませているようだった。

「じゃあ、また明日」と言って二人は電話を切った。

今度はもう失敗しない。ちづ姉にも頼らないと誓いながら、パソコンの画面に表示されていた現在金額をイチは満足気に眺めていた。

窓の外には夏を告げる蝉の声が弾んでいた。

ちづ姉は自分の部屋で原稿を書いていた。文書作成ソフトを立ち上げながら、スケジュールの確認をする。

「さてと、明後日にはコラムの締め切りだし、そろそろ本腰いれなきゃね」

ちづ姉が大きく伸びをする。

文書作成ソフトには、タイトル部分に大きな文字で「片桐光太郎の『相場を読む』」と書かれており、来週の相場を細かく予想している所で止まっていた。イチとの電話で休めていた手を、再びキーボードへと向け、快調に文章を打ち始めるのだった。

「ほんと、あたしの周りの男は手間がかかるんだから。父さんもよね。自分は管理職の仕事と講演に忙しいからって、コラムや本はほとんど私に任せるし」

自らの現状を確認するように、ちづ姉がつぶやいた。

大学を卒業する頃には、正体をばらしてやろうかな。

講演と対外折衝には父の光太郎、著述業は娘の千鶴。千里眼・片桐光太郎はこの親子二人からできていますって。

ちづ姉はいつか来るかもしれないその時を思い浮かべる。イチを含めた世間の慌てふためく様を想像することが、彼女の持ついたずら心をさらに刺激した。

〈完〉